

十和田奥入瀬観光機構 の取り組みを紹介します

☎ (一社) 十和田奥入瀬観光機構 ☎ 243006

(一社) 十和田奥入瀬観光機構 (小野田金司理事長、以下「機構」) は、市や商工会議所、商工会、金融機関、運輸・旅行会社などが中心となって組織化を進め、昨年3月に設立、4月に活動をスタートした法人です。

それまで(一社) 十和田市観光協会と、(一社) 十和田湖国立公園協会とで地域ごとに分かれて行われていた観光案内などの業務を一元化するとともに、地域の人々が楽しむための観光振興ではなく、「地域外の人々が楽しんで生じる経済効果を地域の人に波及させる」ための組織として誕生しました。

1月には、インバウンド(訪日外国人観光客) 需要にも対応した観光地域づくりを行っている活動内容が認められ、観光庁から「日本版DMO」(観光地経営組織) として正式に登録されました。

スタートしてからこれまでの機構の活動をお知らせします。



日本版DMOの登録証を受け取る小野田理事長(左)



登録証

1 地域の事業者の参画



地域の事業者を中心に約100人が参加した総会

スタートして最初の総会は、ユニークベニュー(※) といえる現代美術館で昨年5月に行いました。

宿泊、交通、体験、飲食、物産製造、建設など地域のさまざまな業種の人々が機構の会員として観光地域づくりに参画しています(1月末現在の会員数206社)。

また、市街地・奥入瀬・十和田湖の各エリアで関係事業者との座談会を毎月行い、より良い観光地域づくりのための話し合いをしています。この話し合いをきっかけに、昨年7月には、焼山地区の宿泊



「奥入瀬溪流温泉」へ変更を発表

施設で構成されている「十和田湖温泉郷旅館組合」と地元の2町内会が、夏に開催される東京オリンピックを控え、奥入瀬への注目が高まってきていることから、これまで使用していた「十和田湖温泉郷」の名称を4月から「奥入瀬溪流温泉」に変更すると発表しました。

※ユニークベニューとは…歴史的建造物、文化施設や公的空間などで、会議・レセプションを開催することで特別感や地域特性を演出できる会場のこと。

2 インバウンド対応

現在、日本の観光需要の成長を支えているのは、インバウンドです。人口減少や高齢化により、日本人の旅行者の減少は避けがたく、従来のように日本人のみを対象にしていると、経済規模はどんどん縮小してしまいます。

しかし、そのような負の要素ばかりではなく、世界から十和田奥入瀬地域が注目され、今後まだまだ外国人観光客の需要は伸び得るといえる側面もあります。

昨年、世界的に権威ある旅行雑誌「ロンリー・プラネット」で、2020年に訪れるべき世界の観光地の3位として「東北」が取り上げられましたが、その際に紹介された写真は、十和田湖の恵比寿・大黒島の写真でした。



恵比寿・大黒島

3 観光コンテンツ開発

十和田湖や奥入瀬溪流がどんなに美しく、現代美術館がどんなに魅力的でも、それらが「ある」というだけでは、観光客が滞在した際の満足度は上がりません。満足度を上げるためには、楽しいもの、おいしいもの、驚くものなど常に新鮮なものをそろえておく必要があります。機構では、それらの観光コンテンツの掘り起こしや開発も地域の事業者と一緒にしています。

また、ランドオペレーターと呼ばれる旅行サービス手配業を行う事業者として登録し、魅力的なコンテンツを国内外のエージェントなどに販売できる体制をとっています。



ナショナルジオグラフィックの取材風景



韓国での商談会



ストリートピアノ

現代美術館から中心市街地へ誘客するための取り組みとして、アートステーショントワダにストリートピアノを設置。市内の廃校のピアノを活用し、カトリック幼稚園の園児とイラストレーターの安齊将さんがピアノに絵を描きました。



プロポーズ花火

台湾からの観光客がプロポーズの舞台に十和田湖を選び、花火を打ち上げました。湖畔地域の皆さんで応援し、プロポーズも成功しました。十和田奥入瀬地域を舞台とする花火や写真撮影のプランは商談会でも注目されています。

4 受け入れ環境の整備

観光客に気持ち良く旅行していただくための環境整備や、地域の事業者の底上げのための勉強会などを、市や関係機関とともに行っています。



市と機構とで連携し、焼山地区の「奥入瀬溪流温泉」名称変更に伴う看板などのデザインについて話し合いました。



生活路線も観光関連交通も、どうしたら便利になっていくか、それを模索する仕組みであるMaaS(マース)についてや、宗教などにより食べ物に制限のある人(ベジタリアン・ハラールなど)への対応に関するセミナーを開催。多数の市民が参加しました。



「観光」は、ごく一部の事業者のものと思われがちですが、実は地域への波及は非常に大きい産業です。また、外国人観光客の中には富裕層もいるため、旅行会社からは、市内の飲食店に対し地元産の野菜を使うことを指定したり、5,000円以上のランチをツアーの標準に組み入れるなどの要望が出てきています。機構では、地域の魅力を伝え、波及効果をもたらすための取り組みを引き続き行っていきます。世界のたくさんの人が十和田奥入瀬地域に注目しています。ぜひ市民の皆さんも、観光客を受け入れる一員として、笑顔でおもてなしをしていただきたいと思います。

【機構会員募集中】 十和田奥入瀬観光機構は、会員事業所の皆さんで構成されている一般社団法人です。事業者の皆さんの参画をお待ちしています。